保育園児の集団登山
山の子保育園の登山への関わり

樋　沢　秀　子（山の子保育園）

１．はじめに

山の子保育園は、山々に囲まれた長野県松本市で41年の保育を続けてきた。

創立時より「四季おりおりの自然を全身で感じる山歩きや散歩を楽しみ、様々な発見や、好奇心に満ちた活動を通し、意欲的で主体性のある子どもを育てる」ことを理念の１つとして大切にし、その活動の一環として「登山」には重要な位置づけをしている。近所の里山から高山帯の山まで様々なところをフィールドにしており、その活動内容を紹介することによって、関係各位が保育園児の登山について考察をすすめる一助となれば幸いと思う。

（以下の文章については、樋沢園長にインタビューした音声記録から編集したものである。記載内容については確認をいただいているが、文体等の責は全て馬目にあることを承知いただきたい。また、「さいごに」のところは樋沢園長に執筆していただいた。）

１）山の子保育園について

1978年１月、長野県松本市にて無認可の「山の子共同保育園」として創立、2007年４月より社会福祉法人山の子会「山の子保育園」としてスタート。現定員80名

2012年、姉妹園として長野県東筑摩郡山形村に認可園「やまのこ保育園」がスタート。

２）当園の保育理念と登山の関わり

普段の、というか毎日の活動として、小さい頃から野原や山、河原などいろいろな場所を歩きたいと思っている。子どもたちは自然の中で土いじりや水遊びをするのが大好きだ。０歳からよく散歩に行っている。１～２歳から近所の里山（千鹿頭山や東城山）に登りに行くようなり、年長の５歳児になった時点で登山へと向かって行く。

登山活動に対して、具体的な教育効果を特に期待しているわけではない。前述したとおりにこれまで一貫して自然の中での遊びを大切にする保育を行ってきた。できるだけ野山に出てたくさん体を動かしたいと。そのつながりで里山を登り、自然と高い山にも足を向けるようになっていった。

３）保護者との関わりについて

「共同保育」を理念として掲げていることもあり保護者が積極的に運営に関わってくれる。幸いなことだが、この保育園を選んで入ってくる家庭の保護者にはアウトドアスポーツ好きの方が毎年何人か必ずいて、登山にも積極的に関わってくれるのでありがたい。実際の登山の付き添いからサポート的なことを含めて保護者の理解と協力を無くしては続けることはできなかっただろう。

２．登山活動紹介

近所の里山をはじめ、八ヶ岳方面や鉢伏山などいろいろな山をこれまでたくさん登ってきた。近年では美ヶ原登山と八方池コースが定着してきている。最近、それに入笠山登山も加わって多様な登山を行っ

ている。以下、定着して長い経験のある２例を紹介させていただく。

１）美ヶ原登山

【三城登山口（標高約1,500m）～ダテ河原コース経由～美ヶ原・王ヶ頭（2,034m）～百曲がりコース経由～三城下山，総歩行距離6.6㎞】登山時期：７月

①　このコースを選んだ理由

三城からのルートは、（地元の小学校５年生の集団登山ルートと同じ、大人でも半日以上がコースタイム）保育園児にはかなりハードかもしれないが、それを特に意識してルートを選んだ訳ではない。里山での登山経験の積み重ねにより見通しが立ったからで、無理をさせて登っている訳ではない。もちろんいきなり往復登山を始めたのではなく、様々な試行（登り片道だけだったり、そこから美術館へ足を伸ばしたり）と多様なアレンジの経験からだんだんと往復登山が出来るようになってそれが定着するようになった。

頂上近くまで車両が回せるという利便性もあって、亜高山帯への登山としては登りやすいルートであること。そして当園舎から頂上がはっきりと見えることも良い。子どものたちの目標になるし達成感を感じられる。

②　子どもたちの様子

往復の時は、AM８時30分から登りはじめてPM４時30分までかけて下山している。ヘトヘトになるがそれは子どもたちにとって貴重な体験だ。帰りにいつも温泉に入るのだが、そこですぐに元気いっぱい、回復力の凄さを感じる。自分の力を使い切るという経験をこの時期にするということは本当に大事なことなのだと深く思う。その晩の夕食（園舎でのお泊り行事２日目の晩）の食べっぷりはそれは見事で笑いが出てしまう。

③　７つの保育園集団登山

最初は当園単独の行事であったが、保育理念を同じくする埼玉県の３園との合同で登山を行うようになった。そのかたちでかれこれ25年以上は活動している。始めた頃は子どもが30人くらいの登山であったが、途中からさらに姉妹３園が加わって現在は７園合同の大規模な集団登山となっている。

2019年度の登山では、参加人数は子どもが約90人。大人（保育士＋保護者）が約30人であった。子どもが90人という規模は大きいとは感じている。そのため、登山の際は園ごとに子どもの様子を把握しながら体制に責任を持って登っている。

それでも全体の行動は遅くなりがちで、先頭が休憩してから最後尾が到着するまでの待ち時間がすごく長くなってしまうこともある。

しかし、この登山は、「お泊り保育」（７園の年長組が、２泊３日の日程で山の子の園舎に合宿し、色々な自然体験をする。）の一環であり、ずっと続けてきた交流でもある。また、埼玉から来る皆さんから刺激をもらったり、学ばせていただくことがたくさんあるので、とても楽しみにしている。今後も、保育士がしっかり子どもの個々の状況を把握し、各園が遠慮なく提案をして、相談しながらリスク管理を確かなもののして実施を継続していきたい。

④　保護者の参加について

「お泊り保育」は保護者の支えがあってこそ成り立つ部分が多い。登山の当日も手作り（保育士と保護者が、園の調理室にて当日の朝に人数分用意する）の朝食と弁当など多数の保護者の協力によって出来上がる。相当の労力であるけれど理解していただいて今日まで続いていてきた。

実際の登山参加人数は絞って適正になるようにしている。一園で５～６人くらい。大人があまりに多

いと、「子どもたちの集団」ではなくなってしまう。言い方が難しいが、甘えがでてしまうというか、自律的ではなくなってしまう。

子どもと一緒に登りたいという希望については理解出来るので、「親子で楽しく」というのは八方池登山の方でと説明し納得してもらっている。園での活動をきっかけにして各家庭でそれぞれの登山をしていただく機会になると良いと思う。

⑤　近年の傾向

ここ２年ほどは、往復での登山を見送っている。頂上から山本小屋の方へ向い、そこでチャーターバスで下山している。2018年度は、あまりの猛暑のために登山を中止にし、高原美術館の散策を楽しんだ。自然の中での活動であるし、その年毎の子どもたちの様子も多様なのでそれに柔軟に対応するようにしている。予定ありきの登山はしていない。過去にも２～３年連続して天候不順により行程の途中変更が続いた時期があった。当園だけに絞った小規模集団で９月に再チャレンジして登った年もあった。

最近は入笠山登山へ行くようになった。いろいろな登山が出来ることでバランスがとれるだろう。

２）八方池登山

【北アルプス・唐松岳の八峰尾根　リフト終点の登山開始地点（標高1,820m）～八方池（標高2,060m）の往復，紅葉時期には大人気の登山コース】

登山時期：９月

①　当園のみの登山（恒例となった八方池）

高山の雄大な景色を見せたいとの思いからはじまった。保護者も積極的であったために続いている。ゴンドラとリフトを使って上がってからの歩きになるので、美ヶ原にくらべて山登りとしてはずいぶん楽だ。実は、松本市はアルプスのお膝元であるのにアルプスに登ったことがないという人が案外多い。興味があってもなかなか登りに行く機会がないという保護者の思いもあって期待されているように感じる。

この登山は、基本的に当園だけで行っている。（時折１園参加することもあるが総数で30名くらい）保護者の同行は自由にしている。2019年は父母そろっての参加が多く子どもと同数くらいだった。家族登山という感じでも良いと思っているが、子どもたちを先頭にして保護者は別グループとして後続するようにアレンジした。甘えすぎてちっとも歩かなかったのが、グループを分けるととたんに元気になって歩き出す。おもしろいなと思う。

３．安全管理について

１）リスク要因と対策

雷には気をつけるようにしている。天気に関しては、中止を含めて慎重に判断してきた。蜂刺されも危険だと感じているが、現状ではなかなか対策が難しい。また、携帯電話が常に入るルートであること、ルートの経験値も大事。しかし、子どもたちの常日頃の様子（体力や性格など）の把握がなによりも大切な安全対策だと実感している。

２）行動食や水分補給について

食事の時間にしっかり食べて欲しいという思いがある。水分補給は適宜行いながら、休憩時間（登りに１回、下山時に１回）には飴玉を与えている。自由な行動食を用意してはいない。

低血糖の子どもが参加する場合もあるので事前にしっかり対応するようにしている。弁当の具材などかなり多めに用意しておりそれらは必要な時には予備食に当てられる。予備の水分も十分な量を保護者に別途運んでもらっている。

子どもたちは、弁当と水筒（麦茶）、雨具、防寒用の上着をザックに入れて各自で背負って登山、靴は

履きなれた普段履きで可としている。

3）今までのアクシデント例

大きなケガは起きていない。今まで、すりむいて絆創膏を張る程度ですんでいる。

近年、入笠山の湿地で、木道から落ちる子が出たときには驚いた。幸いケガはなかったが十分気をつけるようにしたい。午後になって少々眠くなって集中力が低下したのかもしれない。エネルギー切れのようになる前には対処するようにしている。

小さい頃からさんざん里山で遊んできているので体の使い方が上手いのだろうか、これまで大転倒をすることは無かったし、骨折するような事故はなかった。だが、「今までは出来たから」と決めつけたりはしていない。常日頃の園での様子を注意深く観察することはとても大事だ。それによってどの程度の登山が出来るのか、毎年考えている。

3）山岳ガイドの同行（八方池登山のみ）について

6年前の保護者にたまたま山岳ガイドの方がいて同行してもらった。そこからの縁で毎年ガイドをお願いするようになった。高山帯に行くので、様々な判断の場面では心強いし、知識も豊富。お話しがとても面白く楽しい。近年、小中学校の学校登山で山岳ガイドが同行するようになっているが、その流れを特に意識した訳ではない。

4）30年続けてきて思うこと、将来の展望について

子どもたちの体力面での低下を感じる場面が増えてきたように感じる。それに伴い心の部分、「がんばってみよう」という気持ちの持ち方なども弱くなっていると感じる。美ヶ原登山の往復は、これからは厳しいかもしれないとも思う。ただ、昔と同じことをする意義もない。「実践保育」という理念通りにその年の子どもたちに寄り添ってゆく。

すれ違う登山者の方々が、「小さいのに偉いねぇ！」「がんばるねぇ！」と良く声をかけてくださる。それは子どもたちにとって励みになるのでありがたい。しかし近頃、そのニュアンスが微妙に変化しているようにも感じて、周りの目が厳しくなっているのではないか、という不安を感じている。リスクのあることはどんどん省いていくご時世、登山をいつまで続けていけるのだろうかと少々心配でもある。遭難事故は絶対に起こしてはいけないとあらためて肝に銘じている次第である。

変化がある一方で変わらない子どもたちの姿もある。山の中で色々なことを発見し、実に豊かに想像を膨らませることが出来る。曇りがちだった美ヶ原登山中、雲の中に入った時に、「雲を食べてみよう！」「どんな味がするのかな？」と皆が口をパクパクしだしたのはとても可愛かった。登山をしていてもそんな笑いが疲れを忘れさせてくれる。子ども達なりに苦労と達成感、喜びを感じているというのがこちらにも真っすぐに伝わってくる。子どもたちと保育士、保護者がともに共感していく喜びと言えるだろう。それが登山の素晴らしさだと感じている。

さいごに

今まで当たり前のように小さい時から毎日散歩に出かけ、里山を歩き、その延長線上に登山があった。改めて保育園児の集団登山ということについて考える機会をいただき、思いつくまま語ったことを馬目氏にまとめていただき、感謝している。

山の子保育園の西には北アルプス、特に槍ヶ岳の穂先も望め、東には美ヶ原、眼前には奈良井川の支流の薄川が流れ、自慢の風景である。ここで過ごした日々が子どもたちの原風景になってくれたらありがたいと感じている。

山の子保育園園長　樋沢秀子